

句集
「花野」

◎
目次

あとがき

116



111



95



73



43



9

序

竹ノ谷ただし……………4



序

竹ノ谷ただし

春の雲ヘルマンヘッセと歩む道

私は中島さんのこの句に感銘しました。

若い頃、ヘルマンヘッセの短編集をドイツ語で読み、その中の「雲を見る」にある、「私は何の幸福も得られなかった、しかし、世の中は私を殺しはしなかった。私は世の中の美しさを見ることが出来た。私は詩人、小説家になることが出来た」とあります。中島さんもヘッセの様な美しい俳句を作っておられ、総体に诗情あふれた句集です。句全体が作者の日常生活の優しい心情がたゞよっています。特に心に残った句を連挙します。

掃除機に豆の音して春立たてり

立春の絵筆洗へばも色に

白梅のまばたき程に咲き初めし

白梅の白もて心のぞかるる

梅白し一揆の中に祖の名前

ともし火のごと野梅咲き村暮色

春の雲ヘルマンヘッセと歩む道

まだ動く手があり女雛画いており

梅散るや母子濃くする看取りの日日

もう今日は煙となりて春を逝る

烏賊の腸上手に引けて春厨

枝先のもうむづ痒くなる桜

春の窓キャンバスにして八丈富士

水琴に春の音聞く奈良の宿

悲史沈め吉野桜の驕に咲く

大枝垂桜いまだ雪もつ岩木山

斑雪山背にして高遠桜咲く

特攻隊とは童顔の若桜

花の世に弾んでくれぬ喪の心

花人となるや心に病ひ連れ
春尽きて風青くなる峠道
神の庭覚めたばかりの白牡丹
植田にも塔と溶け込む奈良の里
竹落葉局住みしといふ館
郭跡今十葉の花あかり
花茨句作に生きし父祖の村
病む心吹かれに來たり青田風
玉碎の島に血色のハイビスカス
夏帽子見上げる志士の懐手
三大祭り廻り二の足棒にする
蚊を払ふ足輕長屋の昏き土間
闇深く「ほたるの里」とあるばかり
地球儀の裏側からの夏手紙
アルプスの白雲の発つ大花野
遺骨無き叔父の忌とする敗戦日
薄野や阿蘇の放牛声遠く
少子化の国に多産な秋なすび
廻廊を鳴かせ古刹の薄紅葉

紅葉への喝采と聞く川の音
小布施の秋歩く一茶の貌をして
北斗の柄すぐそこに見ゆ山の冷え
石路咲きぬ熟年の日々逃げやすき
信濃路の冬天折の画家に逢ふ
口髭の長き猫来る漱石忌
日脚や、夫をたよりに病んで居り
玉葱に泣かされてゐて冬厨
元朝の富士くつきりと良き予感
うかうかと生きてこの顔初鏡
どんど火や達磨片目になつて燃え
この顔と付き合ひ長し初鏡
初鏡齡に抗ふ紅をさす

益々の御健筆をお祈り致します。



春

掃除機に豆の音して春立てり
春立つやスリッパ踏む豆いくつ
立春の絵筆洗へばもも色に



こけしの瞳入れる筆先春めける
白梅のまばたき程に咲き初めし
足元にもう犬ふぐり仏の座
二輪ほど目覚めていたり臥竜梅

梅咲くや関節ゆるむ少しづつ
白梅の白もて心のぞかるる
梅白し一揆の中に祖の名前
ともし火のごと野梅咲き村暮色



紅梅の空ありがたく病みごもり
紅梅に心上向く日々なりし
土いじりする紅梅の視野の中
脳死への論議さまざま梅白し

白梅紅梅苑に雅みやびの風吹けり
降りぐせの雪に紅梅鮮あざやぎし



白鷺の翔たちて川面を春めかす
老を看る心になれて日々温し
春浅き大安の日の配りもの

好きな花選ぶ三月の誕生日
春一番庭のバケツの駆ける音



戻り寒テレビあれこれ国家論
鶯の声の方へと耳つれて
お馴染の猫に覗かれ春厨

春の雲へルマンヘッセと歩む道
菜の花に菜の花色の路線バス

ロビー広し雛の微笑に迎えられ
まだ動く手があり女雛画いており
折紙の目鼻無き雛貌をもつ



盆梅の寿命を延ばす仏の間
賑わいの梅の散り込むみやげ店
梅満開体温計は八度五分

病廊にしづく持ち込む春の雨
梅散るや母子濃くする看取りの日々



じつくりと放哉と逢ふ春炬燵
初鳴きのまだ幼さきに目覚めけり
スリッパの底のざらつき春嵐



花火ポンポン早春の空はじけ
風強くまだ佐保姫の稚^{おさ}なくて
打首となる床の間の藪椿
人体を透かさるる音春寒し

戻り寒ノートパソコン子に躓けず
雑踏の中のひとりになりて春
首廻しから朝の体操芽吹き初む
すれ違ふ人の香ほのと春の宵
紙を吐く音春寒の心電図

機嫌よく歩り来る犬草萌ゆる
そんなこと出来るわけ無し青き踏む
もう今日は煙となりて春を逝る



ガリバーとなるタンポポの国の中
タンポポの土手歩く人走る人



枝先のもうむず痒くなる桜
烏賊の腹^{わた}上手に引けて春厨
蜷買ふ防犯カメラに見られて
又庭にボール飛び込む春休み

繭形の春の八丈眼下にす
春の窓キャンバスにして八丈富士
寂声の婆のシヨメ節春時雨
春の海猫流人文化の島と云ふ

水琴の春の音聞く奈良の宿
悲史沈め吉野桜の驕り咲く
朧夜を異国の顔と湯を分ち
靴ぼこり溜め城跡の花の中
古井戸も覗きて花の武家屋敷



旅三日玉葱の芽伸びていし
大枝垂桜いまだ雪持つ岩木山
大枝垂桜中から仰ぎ出て仰ぎ

落花踏む大切にしている時間
斑雪山背にして高遠桜咲く
人波に恐をなしてゐる桜
夜桜をしばし別れの子と仰ぐ



くきくきと鳴る首廻す花に雨

花映し終日ひねもす水輪生まれけり

山姥のややに艶めく山桜

ねころんでいたい桜の空があり

寺までの三・二Kの花吹雪

選挙演説空しく聞いてゐる桜
花映し画布となりたる水の面
吸ひ込みて又吐く落花大真鯉



大笑ひはじけて昼餉花筵
さきほどの迷子戻ると花の昼
桜咲き浮かれ過ぎたる膨ら脛
改札に切符さがすも花疲れ



嬉々として車のうしろ追ふ落花
特攻隊とは童顔の若桜
少年の遺書に涙の花しづく
罪深き戦ひ春の胸痛む

花の世に弾んでくれぬ喪の心
里桜宿場につるべ井戸いくつ
平安の世に引き戻す花かがり
人の世の刻それぞれに花散らす



花人となるや心に病連れ
検査衣をガサゴソと着る花の冷
落花つぐとり残されし鴨の顔

小豆てふ村に来てをり遅桜
見上げれば藤紫の風に逢ひ
藤棚をみたす花房日々ゆたか

躑躅^{つづじ}満開胃をのぞかる破目になり
走りつつ手を振る別れ春の雷
ゆらゆらといつも退屈藤の花



賛美歌や新郎新婦に芽吹晴
白蓮のやうな新婦に風甘し
惜春の夜に留袖の帯を解く
春尽きて風青くなる峠道

教え子といまだ言われてあたたかし



